



TITLE:

武將對策の一環として觀たる張浚 の富平出兵策

AUTHOR(S):

山内, 正博

CITATION:

山内, 正博. 武將對策の一環として觀たる張浚の富平出兵策. 東洋史研究
1960, 19(1): 37-56

ISSUE DATE:

1960-07-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/148175>

RIGHT:

武將對策の一環として觀たる

張 浚 の 富 平 出 兵 策

山 内 正 博

序 言

富平の役とは、西紀一一三〇年（南宋・建炎四年、金・天會八年）九月、陝西省耀州富平縣に於いて、宋・金兩國の大兵力が激突し、宋側の慘敗に終つた戰であり、戰の規模、宋側の積極的な行動及びその結果生じた支配領域の變化から見ても宋金交戰期における特筆すべき戰として戰略的且つ政治的意義をもつものである。本稿はこの特筆すべき戰を計畫した南宋大政治家の一人張浚の行動について、南宋新政權に對しとかく懷疑的であつた陝西武將群及び四川官僚群の動きを配慮しつつ考説を進めたものである。就中此の出兵策に對する陝西武將群の猛反對、それにも拘らず出兵を斷行し得た張浚の行動は深い政治的背景の所在を

暗示し、ここに淺學非才、不勉強をも省りみず愚考を致した所以があるが、大方の御批正を得て至らざる所を補足出來れば幸甚である。

一 富平出兵に關する武將群の反對

明受の亂の平定や范瓊の誅滅によつて一躍その政治的力量を買われた張浚は、建炎三年七月、宣撫處置使として機幕・幕將群並びに千五百人の親兵・騎三百を従え、時價二百二十萬緡に及ぶ度僧牒の他、紫衣・師號を携行して行在を出發し、⁽¹⁾途中湖北・京西方面の諸勢力を招定しつつ長江より漢水を経て三ヶ月後の同年十月、關陝の要衝興元府に入つた。所が建炎以來繫年要錄（以後要錄）⁽²⁾卷二八・同月戊戌の條には

知樞密院事宜撫處置使張浚至興元。中略。浚又以武功大夫忠州防禦使本司前軍統制王彥爲利州路兵馬鈐轄。

浚初至漢中。問諸將以大舉之策。彥曰。「陝西兵將

上下之情皆未相通。若少有不利。則五路俱失。不若且

屯兵利・閬・興・洋。以固根本。若敵人侵犯。則檄諸

將帥。互爲應援以禦敵。若不捷。亦未至爲大失也。」

時浚之幕客皆輕銳。聞彥之言。相視而笑。彥以言不行

。即求去。故浚因而授之。

とあり、彼が早速諸將を集めて進取の策を議したこと、使司前軍統制の王彥が陝西の兵將の上下の情が未だ通じていないことを理由に根本を固める慎重論を持して反対したと、それが氣鋭の幕客達の物笑いとなり、憤然とした王彥がその職を辭し、利州路兵馬鈐轄として出成したことが知られている。これは富平出兵の約一年前、張浚が現實に提議した最初の出兵策であり、背後には微妙な政治的意圖が感じられるにせよ、ともかく河東の大姓に生れ八字軍と呼ばれる勤王軍を組織して金軍を屢々苦しめた經歷をもつ王彦の慎重論は確かに聴くべき所があり、浚が着任早々であり、しかも陝西經略使群を改易して間もない情勢から判斷

しても、それは妥當な意見として客觀性をもつものと思われるが、浚は採用しなかつた。しかし出兵を斷行するにも至らなかつたのである。所が翌年八月になると浚のこの出兵策は再燃し、右とは比較にならぬ程多數の反対があつたにも拘らず遂にその反対策を押えて出兵に迄踏みきつたのであつて、この時の主な反対者は武將の曲端・吳玠、幕客の劉子羽・楊晟等であつたが、中でも陝西第一の兵法家として將兵の信望を集めていた曲端の反対は最も激烈であり、要錄卷三六・同月癸未の條に

上略。(張浚)召諸將議出師。都統制武威大將軍宣州觀察使曲端曰。「平原廣野。敵便於衝突。而我軍未嘗習戰。且金人新造之勢。難與爭鋒。宜訓兵秣馬。保疆而已。俟十年乃可議戰。」中略。(張)彬至渭見端。問曰。「公嘗患諸路兵不得盡合。及財物不足以供軍。今張公之來。兵已合。用已足。洛索孤軍深入吾境。我合諸路。攻之不難。失今不擊。若尼瑪哈併兵而來。何以待之。」端曰。「不然。兵法先較彼己。必先計吾不可勝。與敵之可勝。今敵可勝。只洛索孤軍一事。然彼兵伎之習。戰士之銳。分合之熟。無異前日。我不可勝。亦只

合五路之兵一事。然將帥移易。士不素練。兵將未嘗相識。所以待敵者。亦未見有大異於前日。萬一輕舉。脫不如意。雖有智者。無以善其後。又自敵入犯。因糧於我。彼去來自如。而我自救不暇。是以我常爲客。彼常爲主。今當反之。精練士卒。案兵據險。使我常有不可勝之勢。然後徐出偏師。俾出必有所獲。彼所謂關中陸海者。春不得耕。秋不得穫。則必取糧於河東。是我爲主。彼爲客。不二年。必自困弊。因而乘之。可一舉滅矣。」云々。

とあつてその意見が見えているが、それは兵法に立脚し、現實の彼我の實力に對する冷徹な分析から始まる所の如何にも兵法家に相應しい堂々たる意見であつたことを察することが出来る。そうして北宋以來専ら遼・西夏の侵入防禦を目的として訓練され、且つ方臘以來の中央よりの相繼ぐ動員に勢力を急減した結果、背後から襲つた金の陝西攻略の軍に對して自らの據點を守りつつゲリラ的反抗を續けるのに手一杯であつた陝西諸軍の現實、又その諸軍を指揮してともかくもそれ迄陝西の大部分を維持し續けた彼の戦法や戦歴⁽⁴⁾から見ても、この反對論が、裏面には確かに浚に對する個人的反感を含むにせよ、尚且つ當時の現實に對して

一應の客觀性をもつものであつたことを察知出来るが、一方張浚から拔擢され、武將としてはむしろ端とは逆の立場にあつた吳玠⁽⁵⁾すら、富平出兵に就いては要録の同條に

上略。秦鳳路馬步軍副總管右武大夫忠州刺史吳玠曰。

「高山峻谷。我師便於駐隊。敵雖驍果甲馬厚重。終不能馳突。吾據嵯峨之險。守關輔之地。敵卽大至。決不容爭此土。」云々。

とある如く、宋軍に有利な高山峻谷の險に據つてゲリラ的抵抗を行う可しと結局は端に歸一する意見を以て反對していることは、更にその客觀性を裏付けるものと思われる。吳玠も以前は曲端の指揮下に在り、猛將として金軍の攻撃を粉碎した經驗をもち、従つて金軍の特質を體得していたものと見てよく、この點王彦や曲端らと軌を一にしていた。即ち彼等は金軍の恐る可き實力を體感し、その攻撃を抑える方法についても、又宋軍の弱點についてもこれ迄の經驗を通じて熟知していたが故に、危険な行動に對しては極めて慎重であり、それが如上の反對論を彼等に展開させ、その反對論に客觀性の認められる所以であつたと思われる。所がこれに對して出兵策を進めた張浚は文臣であ

り、たとえ苗傳や范瓊の如き國內亂賊の鎮壓に武將の指揮者としての經驗があつても、直接責任者として金軍と對決したことはなく、殊に陝西方面の戰略的利害の認識においては到底曲端ら現地在住の武將達の右に出るものではなかつた。従つてそのような張浚の戰略に左右されて自らの運命を賭さねばならない此の出兵策に彼等が猛然と反對をしたのはむしろ當然とも云えるのであつて、それはやがて過去何回となく文臣の指揮に従つて行動した際一度の勝利も收め得ていないと云う實績と相俟つて、三朝北盟會編(以後會編と略稱)・建炎四年九月二十三日の條に

上略。是時大學之議已定。雖三尺之童。皆知其不可。幕客與兵將。皆心知其非。而口不敢言。唯諾相應和者。十八九。云々。

とある如く、各層の廣汎な疑議を喚起する結果となつたのである。

以上張浚の出兵策に對し曲端を始めとする武將群・幕客達が一齊に劇しい反對の態度を示したことが理解せられた。かような猛反對を省りみず強引に自説を敢行することは、萬一それが失敗に終つた場合恐る可き結果を招くもの

であり、更に戰略にかけて錚々たる専門家が擧つて反對していることは、それが失敗に終る可能性を暗示するものである。然るに張浚は斷乎として出兵し、右の會編の記事にも見える如く、内心疑議を抱きながらも結局大部分の武將達はその出兵に應じている。然らばこれは一體如何なる根據に基く現象であつたのか。以下これ等の諸點について逐次考説を進めてゆくこととする。

二 出兵理由としての淮上金軍の牽制

出兵理由として先ず第一に擧げねばならないのは張浚自身の示した見解であつて、それは要錄卷三六・建炎四年八月癸未の條に

上略。初(張)浚之西行也。上命浚三年而後用師進取。

及是金左監軍昌與完顏宗弼皆在淮東。約秋高入犯。浚聞宗弼躊躇淮上。度必再犯東南。議出師分撓其勢。中略。參議軍事徽猷閣待制劉子羽爭之曰。「相公不記臨行天語乎。」浚曰。「事有不可拘者。假如萬一有前日海道之行。變生不測。吾儕雖欲復歸陝西。號令諸將。其可得乎。」云々。

とある如くであり、即ち此の時淮上に徘徊していた金軍を此の出兵によつて陝西方面に牽制し、金軍の渡江侵入を未然に防止すると云うのが主目的であつたことを知り得る。

そうして少くとも八月初旬迄は金將の昌（撻懶）も宗弼（兀朮）も淮東方面に在つたのが九月二十日の富平の役には宗弼の参加が見られ、且つ會編卷一四三・建炎四年十一月十七日の條に

撻懶既得楚州。有再謀渡江之意。欲耕地爲守。遂率軍萬人。陷泰州而屯駐。

とあつて撻懶の渡江意志が伝えられていることは、此の張浚の見解を裏書きするものと思われ、このことから要録の著者李心傳もその著建炎以來朝野雜記甲集卷十九「富平之役」の項に

上略。遂合戰于富平。然是冬。達蘭不能渡江。而陝服之師。遂爲羅索（裏室）所敗。中略。時人皆以此咎公。特未知其本心爾。

として張浚の行動を容認し且つ辯護しているのである。即ち以上によればこの張浚の出兵理由は極めて明確であり、且つ南宋の祿を食む官僚として萬人を納得せしめる大義名

分を有し、今更何もこれに對して附言することはないようである。所が宋史卷四三八李心傳傳には

上略。心傳有史才。通故實。然其作吳獵・項安世傳。

褒貶有愧秉筆之旨。蓋其志常重川蜀。而薄東南之士

云々。

とあり、彼が同郷人として川蜀の士を重んじたことが見え居り、而も張浚は同書卷三六一張浚傳に

張浚。字德遠。漢州綿竹人。唐宰相張九齡弟九臯之後。父咸。舉進士賢良兩科。云々。

とある如く蜀の名家の出身であることから、心傳の張浚評にはそれをその儘信用し難い點のあることが、理解されるが、事實會編卷一四二・建炎四年九月二十三日の條に見える富平之役の叙述によつて著者徐夢莘の見解を問えば

或有以諸葛孔明比浚者。幕客以爲譏而怒之。彼曰。「非敢譏也。孔明應變將略非其所長。是以似之。」

という議論を以て結論としていたのであつて、その批判は痛烈を極めているのである。さすれば李心傳によつて支持され、一見議論の餘地なしと見られた張浚の出兵理由にも、更に精密な情勢分析が要求されるのは當然である。

イ 金國の對宋軍事方針の變化

既に張邦昌を冊立して失敗した金國は、その年の冬、陝西方面の經略を第一とする左副元帥宗翰及びその一派の意見を斥けて、高宗追撃に主力を注ぐ強力な軍事行動を再開し、⁽⁶¹⁾戰線は忽ち京東・京西の諸郡から淮南方面へと擴がり、建炎三年二月には高宗を遂に長江以南に追い落す迄となつたが、翌三月漢人劉豫を知東平府として舊河以南の統治を委ね、⁽⁶²⁾やがてそれは此の年の冬勇將宗弼らの渡江強襲による高宗追撃が失敗し、剩えその退路を宋將韓世忠らに遮斷されて結局得る所が殆んどなかつたというにがい經驗を積んだ後、即ち翌年五月宗翰らによる齊國建設の議の決定、七月冊文の降下、九月劉豫の受冊となつて、⁽⁶³⁾漢人を利用する着實な占領地經營方針が對宋政策において強調されることとなつた。この方針は當初平宋後の計畫とされたが、⁽⁶⁴⁾それが急に實現されたことは、複雑な背後の政治事情はともかく、⁽⁶⁵⁾渡江の經驗に基く東南攻撃の一應の斷念を示すものであり、一方又宗翰が以前から主張していた西夏牽制を理由とする陝西總攻撃の開始を約束するものであつ

た。就中後者は金史卷三・太宗紀・天會八年七月辛亥條に先遣婁室經略陝西。所下城邑叛服不常。其監戰阿盧補請益兵。帥府會諸將議曰。「兵威非不足。緩懷之道有所未盡。誠得位望隆重恩威兼濟者以往。可指日而定。若以皇子右副元帥宗輔往爲宜。」以聞。詔曰。「婁室往者所向輒克。今使專征陝西。淹延未定。豈倦于兵而自愛耶。關陝重地。卿等其戮力焉。」

とある如く、現實の政策として決定されたが、時期及び高宗追撃のため從來の主張を果し得なかつた宗翰の立場等からみて、それが齊國建設と密接な連關のあることを確認し得る。思うに當初破竹の勢で進撃した金軍も、戰線の擴大に伴う兵力の不足及び日増しに劇しさを加えてきた宋側の抵抗に遭つて各地で戰線の膠着狀態を來し、就中渡江強襲の失敗は此れ以上の南方攻略の續行に重大な疑議を生じた。それ故一方に於いて齊國建設を促進して河南・山東方面を着實に把握し以て宋に對する備えとすると同時に、一方では主力を陝西方面に注ぎ、建設した齊國に對して西方よりの脅威を除くと共に戰線の膠着狀態を打破して沈滞した士氣を再興する一助すると云うのが、この齊國建設及

び對宋軍事方針の轉換を政策として採用した最大の理由であり、且つ軍事方針の轉換が齊國建設の進行と連關して見られる所以であつたと思われる。さすればかかる政策の動きから見て、富平出兵前後の金國、就中宗翰に飽く迄渡江攻撃を現實の方針として進行しようとする意志があつたとは思われず、事實此の年の冬は勿論、それ以後も遂に金軍は長江以南の土を踏まなかつたのである。以上の觀點から此の時實際に淮南にあり秋高入犯を約したと云われる宗弼・撻懶二將の動きを検討するに、宗弼の場合、韓世忠の激しい抵抗を排除して長江を渡りようやく淮西の六合縣に迄辿り着いたのが五月であるが、その後も會編卷一四一・建炎四年八月十日の條に

兀朮自建康回軍至六合縣。欲發舟船取楚州路行。而趙立⁽⁴⁾在楚州。薛慶在高郵軍。舟船不可發。故兀朮駐軍六合。未得歸。云々。

とある如く、宋の鎮撫使趙立・薛慶らのために歸路を阻まれて苦しんで居り、これ等のにがい體驗が遂に勇將宗弼をして金史卷七七、劉豫傳に

上略。初宗弼自江南北還。宗翰將入朝。再議以伐宋

事。宗翰堅執以爲可伐。宗弼曰。「江南卑濕。今士馬困憊。糧儲未豐足。恐無成功。」宗翰曰。「都監務偷安爾。」云々。

とある如く、江南攻撃を躊躇せしめるに至つた所以と思われるが、如上の状態にある宗弼に再度の渡江侵犯を敢行する意志があつたとは先ず考えられない。むしろ此の直後、宗輔に従つて陝西攻撃軍の主力に参加したのは、彼の場合願つてもないことであつたと思われる。他方撻懶の場合、彼に渡江の意志有りとされたのは富平出兵の二ヶ月後、即ち彼が四十餘日を費してようやく楚州城を屠り長江沿岸に迄達し得た時のことであるから、出兵の議が行われた頃はたとえ意志があつたとしても可能性は全く未知數であり、その意志も、劉豫を力薦して齊國建設に努力していること、楚州落城時の混亂に乗じて從軍していた和平論者の秦檜の歸國に機會を與え、その後も彼を通じて和議を積極的に進めたこと、楚州の例にも明かな如く、武將としての才腕は到底宗弼の敵ではなかつたこと等の諸點から見て、如何程の眞實性があつたか甚だ疑問である。萬一その意志が眞實であつたにせよ、既に對宋政策が先述の如く決してい

る以上、それは飽く迄一邊將の個人的意志に過ぎず、それを以て金國全體の動向とするのは問題であらう。そうして張浚が出兵理由の根據とした淮上金軍の實態が以上の如くであり、且つ又大きく轉換しつつあつた金國の對宋方針をその背景として考える時、金國の動向を捉えた張浚の分析に些か嚴密を缺く點のあることは認められてよいであらう。

ロ 東南政府の事情

如何に金國の情勢が如上の方向を示したとしても、南宋側が渡江侵入の危険性を慮つてその對策に狂奔したのは當然であつて、特に前年の失敗に鑑み、建炎四年には、主防論者として主去論者の呂頤浩に代り宰相の椅子に就いた范宗尹によつて、淮南・京西方面の自立的諸勢力を組織して東南の防壁とする鎮撫使群の列置を始め、國軍の改編、沿江三大帥の創設等、具體的現實的な諸策が斷行せられてゐる。つまり政府は金軍侵入の危険性を豫想したからこそ、ただ漠然と兵を聚め長江の水を恃んで備えとした前年とは比較にならぬ程現實性に富む對策を打ち出したのであつ

て、このことは要錄卷三六・建炎四年八月丁亥の條に

上略。先是議者以金人尚留淮東。恐其侵軼。欲復爲海道之行。范宗尹獨以爲危事不可再蹈。若頻年海道。則遠近離心。大事去矣。乃詔浙西安撫大使劉光世遣兵防江。仍會合淮南諸鎮。併力邀擊。云々。

とある如く、議者の逃避策に反對し、東南の死守方針を貫いた范宗尹の政治方針に他ならなかつたのである。所が彼の場合、逃避策に反對し金人防禦に全力を注いだとは云え、それを根本として更に中原に出兵し失地恢復を圖る程の積極性はなく、それは當時の政府の實力から見て最も現實に即應する政策であつたが、この點が又主戰論者である張浚とも相容れぬ點であつた。従つて張浚の出兵が金軍の牽制に役立ち、たとえ宗尹の本命とする金軍の捍禦に効果を擧げる可能性をもつたにせよ、他面において失敗の危険性をも又多分に内包する積極策は、宗尹が廷議を主宰する限り政策として打ち出される筈はなかつた。このことは、宗尹と同じく主防論に立ちながら武漢遷都を主張して彼より若干の積極性を示した御史中丞の趙鼎ですら、要錄卷三二・同年四月甲戌の條に

御史中丞趙鼎言。「上略。願詔張浚未可長驅深入。姑令五路各守其地。犄角相援可也。」

とある如く、出兵が時期尚早であり、それよりも陝西五路を固めることが先決であると論じていることによつて更に確證せられる。さすれば前年張浚が出使した際高宗が命じた「三年而後用師進取」の方針は、この年になつても依然として政府の方針の中に生きて居り、宗尹の宰相時代に入つて益々それは確固たるものとなり、つまり政府としては直接的防禦體制の樹立に全力を挙げ、それは着々と整備されていつたのであつて、張浚に對しては進取牽制の策よりも専ら關・陝の根本を固める從來の方針の繼續を期待し、それが又當時の政府の現實における最良の策でもあつたのである。従つて、若し、張浚が政府の如上の現實を以て出兵策を必須とする理由としたとすれば、金國に關する場合と同じく、東南政府に對する情勢分析も又政治家としては嚴密を缺いていたものと見なければならぬ。

以上張浚の出兵理由である「淮上金軍の牽制」について、その背景となる金國及び東南政府の現状を検討した結果、何れも彼の見解に示された切實感を裏付ける根據に乏

しいことが判明した。勿論眞意はともかくとして金軍が淮上に現存する以上、それを牽制して政府の窮狀を救うことは、理由として一應大義名分の立つものであるが、さりとて如上の漠たる情勢分析により、間違えば一身の危険すら予想される此の出兵策を、大政治家たる彼が敢行したとするのは納得出来ない。果して此れのみが唯一の出兵理由であつたのであろうか。

三 張浚出使の目的

古來四川は自然の要塞に守られ、產物は豊富にして自立勢力の培養に適した地方であり、又陝西は所謂邊境の地として誇り高き武將達が盤踞し、何れも金勢力の侵入に對しては頑強な抵抗を示したが、さりとて未だ微々たる東南政權の支配に對しても疑惑が強く、従つて此の方面の統治には他とは比較にならぬ程の障壁があり、就中、政府より陝西節制使を命ぜられ、陝西六路の武將勢力を糾合して金軍を捍禦すべき大任を負うた王庶の命に従わず、彼を殺そうと迄した勇將曲端を始め端に追従する陝西武將群の行動、或は四川撫諭使を命ぜられ、富財を吸収して急増する軍費

を賄うべく努力した喻汝礪に對する盧法原・趙開・靳博文ら四川の官僚群の猛反對等は極めて大きな問題であり、是非とも何等かの強力且つ巧妙な政治的配慮を必要とした。ここに政府が四川漢州の産、唐の宰相張九齡九世の孫であり、名家の傳統を擔つてこの方面に隱然たる聲望を有し、又幼少より大器の聲高く、明受の亂、或は范瓊の誅滅に武將群を驅使して秀れた政治的手腕を見せた張浚を拔擢し、異例の大權を付してこの方面に出使せしめた所以があり、期するところは、彼の政治力によつてこの方面の武將達を壓服し、且つ豊富な蜀財を開拓してこの方面における金勢力の侵寇を喰い止めつつ、やがて政府の支配を滲透せしめ得る素地をすることであり、これが「三年而後用師進取」の政治的背景であつたと思われるが、要錄卷三二・建炎四年三月辛酉の條に

上略。上曰。「張浚措置陝西。極有條理。薦人用士。持心向公。」張俊・辛永宗皆言。「陝西將帥往往服浚謀略。」呂頤浩曰。「陛下雖失之杜充。復得之張浚。」王綬曰。「張守節語臣。浚好謀有大志。嘗招諸將至臺。講論用兵籌策。今果能行所言。眞不易得。」上復言

浚用孫渥代辛興宗按王擇仁等罪。稱善者久之。

とある如く、彼が陝西の將帥を壓服し、此の方面の經營に成果を擧げていることについて、高宗始め文武の重臣達が絶賛していることこそ、出使の際、彼に托した政府の如上の目的を確證するものではあるまいか。即ち出使に際し政府が張浚に期待したのは、進取の策よりも先ず陝・蜀方面の經營であり、それには特に自立的傾向の強い陝西武將群を壓服し、彼等に南宋の權力の所在を認知させることが何よりの急務であつたわけである。一方張浚は要錄卷二三・建炎三年五月戊寅朔の條に

上略。上問(張)浚以方今大計。浚請身任陝・蜀之事。置司秦川。而別委大臣。與韓世忠鎮淮東。令呂頤浩駕來武昌。張俊・劉光世從行。庶與秦川首尾相應。上許之。云々。

とあり、又同書卷二八・建炎四年十月戊戌の條に知樞密院事宜撫處置使張浚至興元。上奏曰。「竊見漢中。實天下形勢之地。號令中原。必基於此。謹於興元積粟理財。以待巡幸。願陛下早爲西行之謀。前控六路之師。後據兩川之粟。左通荆・襄之財。右出秦・隴之

馬。天下大計。斯可定矣。」云々。

とある如く、行在を襄陽或は興元府に遷して中核とし、陝蜀と東南とを相呼應させて中原恢復の根本とすべきであることを主張しているが、その主張を實現するにも、兩川の粟を開拓し、陝西六路の將帥を懷柔・壓服して爪牙とすることは第一に爲さねばならぬ基本問題であり、この點は政府の期待と共通するものであつた。しかも此のことは自らの傳統的聲望により此の方面に勢力を得ようとする彼の個人的利害とも一致していたのである。

以上要するに、張浚の出使は、政府・張浚何れの側においても、根本を固める手段として、陝西武將群の懷柔・壓服を當面最大の目的とするものであつたことが理解されたのである。然らば此の目的を彼は如何にして進めたか。

四 張浚の武將牽制策

出使當時その行動が疑問視されていた曲端を極力政府に對して辯護した張浚も要錄卷二七・建炎三年閏八月乙巳の條に

上略。(張)浚方搜攬豪傑爲用。以涇州防禦使新除御營

使司提舉一行事務曲端在陝西屢與敵角。欲仗其威聲。承制拜端威武大將軍宣州觀察使。充本司都統制。端登壇。將士懽聲雷動。端退。謂之曰。「使劉平子在。端安敢居此。」平子。濮陽劉銓也。靖康末。以知懷德軍死事。云々。

とある如く、端を都統制に採用したのは彼の武威を借りる爲の手段であり、彼に全幅の信頼を抱いた結果ではなかつた。更に云えば端を牽制する目的からその行動を封じる一つの手段であつたとも考えられるのであつて、それは要錄卷二八・建炎三年十月戊戌の條に

上略。(張)浚治兵興元。欲易置陝右諸帥。乃徙端明殿學士知熙州張深。知利州。充利州路兵馬鈐轄安撫使。而以明州觀察使劉錫代之。中略。旣而趙哲帥慶。劉錫帥渭。孫渥帥秦。於是諸路帥臣悉用武人矣。云々。

とある如く、それ迄とかく陝西武將群から輕蔑され威令を實施し得なかつた熙河・涇原・環慶・秦鳳等路の文臣經略使群を、張浚が行在から帶行し従つて張浚の命には一應忠實であり得ても曲端とは何等統屬關係のなかつた武將達を以て代え、彼等を通じて同方面に權力を伸そうとし、又同書卷三二・建炎四年三月乙巳條に

上略。宣撫處置使司都統制曲端聞敵至。遣右武大夫忠州刺史涇原路馬步軍副總管吳玠及統制官張中孚・李彥琪。將所部拒之於彭原店。中略。官軍敗。端退屯涇州。敵亦引去。端劾玠違節。降武顯大夫。罷總管。復知懷德軍。宣撫處置使張浚素奇玠。尋擢玠秦鳳副總管知鳳翔府。云々。

とある如く、巧みに曲端輩下の最強の武將吳玠を端から離間して腹心の武將に誘引する等、曲端の牽制がその後一連の施策として講ぜられていることから見ても明かである。即ち以上の行動から推して、張浚が出使の始めから陝西武將群就中曲端に注目しその武力を利用しつつ、一方では密かにその勢力を牽制する方針を貫いていつたことを知り得る。然しながらたとえそれが謀略的であつたとは云え、威風陝蜀を壓し、書籍を解し兵法に明るい曲端が自らに加えられる如上の壓力を何故受容れたか。勿論その一方の理由は金・西夏と兩面に敵を控え且つ又浚と事を構えることの不利を熟知したからに他ならないが、それとは別に根本的な理由があり、それが浚の手に押えられていたのであつた。即ち財政問題である。

イ 蜀財の確保及び北送體制の樹立

張浚は如上の武將牽制策の遂行と平行して、蜀財の確保並びにその北送體制の樹立に非常な熱意をもち努力を拂つた。就中第一に注目すべきことは、興元府到着直後、即ち要錄卷二八・建炎四年十月辛丑の條に

張浚承制以朝請郎同主管川陝茶馬鹽牧公事趙開兼宣撫司隨軍轉（運）使。專一總領四川財賦。開言。「蜀民已困。惟權索尚有盈餘。而貪猾認以爲己私。惟不恤怨言。斷而行之。庶救一時之急。」浚以爲然。於是大變酒法。自成都始。云々。

とある如く、趙開を總領財賦の職に充て、彼の意見によつて酒税の増徴を斷行していることである。總領に就いての詳細は別稿に譲るが、この場合は臨時の職として軍事財政を専門に扱つた大元帥府隨軍應副の流れを汲み、且つ四川四路の正規の財政職たる轉運司とは統屬關係がなく、従つて隨時應變の處置を行うに相應しく、特にそれが痛感せられる軍事費應辦の職としては誠に恰好のものであつた。趙開は浚と同じく四川の産、宣和七年以來成都府路の錢糧官

として既にその財政的手腕を高く評價されて居り、いわば在來の正規の徵稅組織の中にあつてその利害を熟知し、その運用の妙を體得していた者と云える。即ち新しい情勢に即應する總領により増徴を圓滑に實行し得る制度を創設しながら、その制度の運營者としては在來の組織の中で最も有能な手腕家を起用した所に張浚の此の體制の妙があり、彼が此の體制を存分に活用したればこそ要錄卷四〇・建炎四年十二月の條に

上略。自(張)浚入蜀。盡起諸常平坊場錢以贍軍。次科激賞絹布。次則盡起常平司積年本息和糴等米。次則對糴稅戶米。云々。

とある如く、驚くべき増徴を斷行し得たのであるが、要錄卷十四・建炎二年三月丁酉の條に

尚書祠部員外郎四川撫諭喻汝礪勒停。初汝礪奉詔剗刷四川歲羨。欲盡取常平所儲錢。徵猷閣直學士知成都府盧法原・轉運判官趙開・靳博文・提點刑獄公事邵伯溫皆持不可。云々。

とある如く、同じく常平所儲の錢を根括しようとして成都府の知州・監司群の猛反對に遭つた四川撫諭使喻汝礪の場

合と比較すれば、この總領方式のもつ財政的意義は一段と明確になるであらう。

右の如く張浚は蜀財増徴に關する基本的體制として總領方式を設定し驚くべき成果を挙げたが、かくして集めた財貨を陝西方面に輸送する手段についても意を用いた。即ち要錄卷二九・建炎三年十一月己酉の條に

宣撫處置使張浚以便宜增印錢引壹百萬緡。以助軍食。其後八年間。累增二千五十四萬緡。浚又置錢引務於秦州。以佐邊用。

とある如く、錢引壹百萬緡の發行及び秦州錢引務の設置は、北宋時代に採用せられた蜀貨入陝手段の復活とも見る可く、即ち趙開を起用して確保した蜀貨をその財政的信用の根據とし、且つ商人の活躍を前提として此の錢引が發行されたことを考える時、蜀貨北送體制の樹立という觀點から無視することの出來ぬ施策と云うことが出來よう。次に注目すべきことは、左表の知州の設置に見られる如く、荆南府・金州・興元府の如き入蜀の關門及び成都府・瀘州・利州と云う所謂嘉陵江水運による蜀陝交通上の幹線を押える要衝に強力な人事を敢行し、彼の腹心乃至はそれ迄經略使

張浚承制知州配置表

據要錄卷二八・卷三四

府・州名	長官名	文武の別	來	歴	就任時期	帶職名
荊南府	解潛	武將	河東制置副使↓坐覆師貶↓在浚軍中		建炎四年三月	↓鎮撫史
金州	王彦	武將	使司前軍統制↓利路兵馬鈐轄		建炎四年三月	金均房州安撫
興元府	王庶	文臣	鄜延經路使兼知延安府↓陝西節制使		建炎四年五月	使↓鎮撫使
成都府	王似	文臣	↓使司參議官		建炎四年二月	利路安撫使
瀘州	辛興宗	武將	環慶經路使兼知慶陽府↓陝西節制使		建炎四年六月	——
利州	張深	文臣	秦鳳經路使兼知秦州		建炎三年十月	利路安撫使

として陝西で活躍していた經路使群を配置していることである。このことが、確保した蜀貨を保全し北送する目的を遂行するに際し、極めて重要な意義をもつたことは論ずる迄もない。以上の點から見て、張浚は蜀貨の北送にも萬全の態勢を確立すべく努力したことが窺われる。そうして以上に見られる張浚の努力は、要錄卷三五・建炎四年七月戊申の條に

宣撫處置使張浚獻金一萬兩。以上令浚措置財用赴行在故也。

とある如く、着任後僅か一年足らずにして早くも一萬兩を行在に獻出し、又同書卷三七・同年九月癸亥の條に

富平出兵時の事情を記して

上略（張）浚又貸民賦五年。金錢糧帛之運。不絕於道。所在山積。云々。

とある如く、豊富な軍需物資の集積が語られている。

ることから見ても、着々と實を結んでいたことが理解されるのである。

ロ 陝西武將群の錢糧不足

要錄卷十六・建炎二年六月の條に見える四川撫諭使喻汝礪の言中に

上略。今關輔榛莽。軍無見糧。故其人專以剽掠爲事。

若上件財帛養之。則秦・晉之民皆爲吾用矣。云々。

とあり、陝西方面の荒廢が甚しく、錢糧の輸入を必須とする事情が理解されるが、北宋時代より既に自給するに足らず、東南方面より連歲莫大な錢糧が投入されていた此の地

域の財政事情が金軍侵入及び盜賊の蜂起による輸送路の閉塞によつて急速に惡化したことは論ずる迄もなく、官給の錢糧に依存していた國軍將兵が勤王に名を藉りて續々と南下したのも、自存の爲の自然の勢であつたが、曲端等の如く最後迄此の地域に踏み留つた連中とても、軍糧問題については年と共に深刻の度を加えていつたのであつて、それは曲端の出兵反對論を示した先掲要録の文中に「公（曲端）營患諸路兵不得盡合及財物不足以供軍」とあるよつても認められる。然も此の窮狀打開の一策として全富を誇つた蜀貨に依存することも、現實には極めて難しかつた。その理由の一つは天險という自然的障害であつたが、他の一つは要録卷十二・建炎二年正月己酉の條に

詔沿邊將兵避難入蜀者。並放罪。限半月赴行在。仍於大散關置關使二員。自今官員入蜀。審驗告敕。無僞者聽過。自兩河失守。兵官之敗散者。多在興・鳳間。招集潰兵入蜀。朝廷聞之。故有是命。

とある如く、蜀に亂の波及するのを防ぐためその天險を利用して行われた嚴しい監察であり、彼等の區別の判じ難い當時にあつて此の蜀の側の態度は、陝西武將群にとつて、

財政面における少なからざる打撃であつたと思われる。更に又當時蜀のみが殆んど賊勢力の侵害なく全富を保ち得たことは、北宋以來の體制が財政面においてもその儘維持されていたことを物語るものであり、そのことは、此の時代徵財・移運に高度の専門的技術を要したことに相俟つて、非合法手段による蜀財の入手を殆んど不可能にした。時期・條件は多少異なるがその後要録卷八〇・紹興四年九月甲戌の條に

初。川陝軍（宣の誤）撫副使吳玠與隨軍轉運使趙開不合。玠謀爲牽制之舉。必欲從陸運糧。開執不可。玠迄自爲之。中路。時玠令縣官部役先至者賞。役夫饑病相仍。死於道路。蜀人痛之。開懼不敢言。云々。

とあつて吳玠の強引な陸運が非常な騷擾を招いているのは右の推論の參考となる。もとより彼等武將群にあつて蜀財に依存することは深刻な錢糧不足を解決する最良の現實的手段であり、ここに史斌・王玠・張宗・吳玠・曲端ら諸武將・諸勢力が入蜀の關門たる興元府・興州方面の支配をめぐり凄慘な死闘を展開した所以があつたが、たとえそれが成功したにせよ、非合法勢力と見做される限り蜀財の入手

には更に大きな困難が横たわつていた。そうして勇將精卒に恵まれた彼等が單なる統兵官の域を脱して雄勁な軍閥の勢力に發展する爲には、是非とも此の錢糧問題を解決する必要がある、それには何よりも先ず蜀人の納得する合法勢力として認められることが前提となり、ここに陝西武將群最大の問題が存したのである。

ハ 錢糧官による武將の監視・牽制

陝西の武將群に如上の問題があつたとすれば、政府公認の政治家として蜀財の調發に合法的權能をもち、且つ傳統的聲望及び徵財・移運體制の確立によつて蜀財を現實に左右し得る立場に在つた張浚が武將群にとつて極めて魅力的存在として映じたのは當然である。曲端が都統制となつた時將士が權聲雷同したと云われるのも、又要錄卷二九・建炎三年十一月條に

上略。參議軍事劉子羽言右武大夫忠州刺史涇原兵馬都監兼知懷德軍吳玠之才於（張）浚。玠亦素負才略。求自試。浚與語大悅。擢爲統制。云々。

とある如く吳玠が進んで張浚に見出されようとしているの

も、微妙な政治的背景はあるにせよ、彼等における如上の魅力の存在を裏付けるものである。腹心の武將勢力が充分でなく武力的強硬手段を眞正面から打ち出せなかつた張浚にとつて、此の財政面における絕對優位の態勢こそ、誇り高き武將群を懷柔し壓服する最も有力な武器であつた。而も彼は此の武器を活用する手段にも細心の意を用いたのであつて、要錄卷三四・建炎四年六月庚辰の條に

上略。（王）彥鎮金州。斂民倍常。凡屬縣莫敢抗。漢陰令任城晁公休獨不用其令。彥召至州。囚欲殺之。公休不爲屈。彥亦弗敢害也。宣撫處置使張浚聞其言。召爲糧料官。

とある如く、税の取り立てに對し武將王彥の威に最後迄抵抗した晁公休を拔擢して糧料官としている事實は、彼が錢糧官の人選に意を用い、有能氣骨の人材を得て爪牙とし、錢糧官の職務に單なる錢糧事務以外の重要な役割を期待したことを示す好例であるが、現實にそれは要錄卷三六・建炎四年八月癸未の條に

上略。（張）浚雖重用（曲）端。然以人言浸潤。不能無疑。乃遣本司主管機宜文字張彬往渭州。以招填禁軍

爲名。實欲伺察端意。云々。

とある如く、機幕の張彬を曲端の動勢探索に派遣していることによつても確認される。張彬こそは嘗つて權陝西轉運判官として命に服さぬ曲端の意を探るべく時の節制使王庶によつて端の軍に派遣された人物に他ならず、以來端の軍に留まり隨軍轉運の職務を遂行していた關係から端軍の機微に通じていた錢糧官であつたと見てよく、その彬を張浚が機幕に採用しただけではなく、更に曲端の動勢探索に派遣したことは張浚の武將牽制の現實を理解する上に極めて注目すべきことである。而も冒頭の章に掲げた曲端の出兵反對論において、端の反對論の語氣に浚に對する場合と彬に對する場合とは顯著な差違が見られることは、如何に端と雖も現實に弱點を握られていた彬には或程度の妥協を餘儀なくせられたのではないかということを推察せしめるものである。即ち張浚は財政面に關して陝西武將群の上に絶對優位の態勢をしき得たが、尚且つその現實の運営には有能氣骨の錢糧官を起用し、錢糧事務を通じて陝西諸軍の監視牽制を行うと云う細心の注意をも怠らなかつたのである。

以上を要するに、張浚は出使の當初より陝西武將群の懷柔・壓服を目指し、武將人事に獨特の謀略を用いてきたが、他方彼等が最も切實とする錢糧の確保についても、その大權と蜀に有する傳統的聲望とを驅使して増徴・輸送に特別の顧慮を拂い、かくして樹立した財政面に關する絶對優位の態勢を以て武將牽制の基本的武器としたことが理解せられた。即ち彼は出使以來一貫して武將牽制の策を本命としそれは着々と具現されつつあつたことが如上の考説によつて判然としたわけである。

五 武將牽制策の遂行と富平出兵

出使以來の張浚の政治的努力が右の如くであつたとすれば、彼があらゆる反對を押し切つて強行した富平出兵のみその例外とすることは勿論妥當ではない。就中出使直後殆んど實現の可能性のない進取之策を問い、それに反對した王彦を前軍統制の地位から追うている事實、又要錄卷五三・紹興二年閏四月壬子の條に

上略。(張)浚初欲調護(王)庶。令與(吳)玠・

(王)彦結好。中略。於是有言庶難制馭者。浚惑之。

檄召諸帥會於益昌。庶亦覺有間已者。以素隊數百人馳會。浚問以進取之策。庶曰。「富平之敗屬耳。軍未可用也。」浚不樂曰。「君欲棄三秦耶。」乃以便宜命庶與知成都府王似兩易。云々。

とある如く、時期は後れるが王庶の疑を正し解任する爲めの手段として進取の策を用いている事實から推しても、富平の出兵策が實は曲端並びに彼に追従する武將群を牽制し壓服する手段、具體的には曲端を都統制の地位から追い彼の兵權を削奪する手段として使用されたことは先ず疑いない。さればこそ此の浚の意をいち早く察した曲端は憤然として反對を決意し、會編卷一四二・建炎四年九月二十三日の條に

上略。(張)浚見兵馬俱集大喜。謂當自此便可以徑入幽燕。問曲端如何。端曰。「必敗。」浚曰。「若不敗如何。」端曰。「若宣撫之兵不敗。端伏劍而死。」浚曰。「可責狀否。」端即索紙筆責令狀曰。「如不敗甘伏軍法。」

浚曰。「浚若不勝復當以頭與將軍。」遂大不協。云々。とある如くその反對のため遂に生命を賭ける迄に至つたのではあるまいか。而も此の時既に端は都統制の職にはなく、

生殺與奪の權は完全に浚の手中に握られていたのである。⁽⁴⁾

富平出兵策がかくの如く曲端解任を含む陝西武將群の牽制策と密接な連關を有したとすれば、それは彼が出使以來孜孜として行つて來た武將牽制についての政治的努力の總決算として極めて重要な政治的意義をもつ大政策であつたことも自から諒解せられる。即ち武將にとつて出兵ということは最高の責任と能力とを問われる絶對的な行動であり、それだけに一層現實問題としては慎重にならざるを得なかつた。かかる觀點から情勢が明かに不利である此の富平出兵の場合彼等が猛反對を行つたのは當然であつた。しかし此の武將牽制という立場から見れば、その反對が強ければ強い程、即ち現實の情況が宋側に不利であればある程、その反對を抑え此の策を強行することは武將達の眞意を探りその歸趨を決する手段として効果的であつた。つまり張浚は此の策を強硬に打ち出すことによつて從來錢糧入手のための妥協として一應彼の命に服している傾向のあつた陝西武將群の眞の歸趨を確認し、從來財政面に關して得ていた彼等に對する絶對優位の態勢を軍事面に關しても亦一舉に確立しようとしたものと思われるのである。しかも尚そ

れが短兵急に過ぎるものであつたとするならば、それは彼の年齢、出自、更に出仕以來の順調な經歷から察せられる彼の性格に負う所大であるが、ここに彼の所謂「淮上金軍の牽制」は行動に對する恰好の名分であつたと同時に失敗に對する安全瓣としても亦考えられ、一層の興味を惹く所以である。

結 語

武將群の猛反對を斥けて強行した富平出兵について、張浚は淮上金軍の牽制を理由として主張したが、當時の金國の對宋方針及び南宋の對金方針から觀てかかる牽制を不可缺とする情勢にあつたとは斷じ難く、むしろそれは表面的理由として大義名分が立つ點に意義があつた。さすれば彼の強引な行動の直接の動機は彼自身が統治する陝蜀の事情に由來するものであり、即ちそれは出使以來彼が最大の政治的努力を傾けてきた陝西武將群牽制策の總決算として一舉に彼等を壓服せんとした強行手段に他ならず、従つて武將勢力を利用する反面その抑壓にあらゆる對策を吝まなかつた南宋建國期の政治方針は此の出兵策においても具現さ

れ、ここに重要な歴史的意義があつたが、更にかかる觀點から富平の大敗が武將牽制策の劇的破局として把えられる時、武將吳玠が陝西武將群を背景に抬頭してきた所以も亦興味ある課題を提供するのである。

註

- (1) 會編卷一三〇・建炎三年七月二十一日條。要錄卷二五・同月庚子條。晦庵先生朱文公文集卷九五「張浚行狀」。
- (2) 要錄卷八・建炎元年八月乙亥條。會編卷一九八・紹興九年十月十九日條。宋史卷三六八・王彥傳。
- (3) 會編卷一四七・紹興元年四月二十一日條。要錄卷十五・建炎二年四月丙寅條。宋史卷三六九曲端傳。
- (4) 前註參照。要錄卷十五・建炎二年五月甲午條。
- (5) 四・五章參照。
- (6) 青谿嶺の戰が有名。會編卷一九五・紹興九年六月二十一日條。琬琰集刪存「吳武安玠功蹟記」。
- (7) 要錄卷二一・卷二二。前掲張浚行狀。宋史卷三六一・張浚傳。
- (8) 童貫・李綱・范訥・范致虛・錢蓋・王庶等悉く大敗した。
- (9) 會編卷一四一・要錄卷三六・建炎四年八月庚辰條。
- (10) 要錄卷三七・建炎四年九月癸丑條。
- (11) 金史卷七四・宗翰傳。同卷七七・劉豫傳。
- (12) 會編卷一三〇・建炎三年六月二十八日條。要錄卷二一・同年三月條。金史卷七七・撻懶傳。宋史卷四七五・劉豫傳。
- (13) 要錄卷三二・建炎四年三月丁巳條。
- (14) 要錄卷三三・建炎四年五月丁未條。

- (15) 會編卷一四一・要錄卷三五・建炎四年七月丁卯條。
 (16) 金史卷七四・宗翰傳。天會五年伐宋の議における太宗の言「俟平宋當立藩輔如張邦昌者」。
 (17) 外山軍治氏著「劉豫の齊國を中國を中心として觀たる金宋交涉」參照。
 (18) 金史卷十九・世紀補、睿宗傳。同卷七二・婁室傳等に同様の記事が見える。
 (19) 要錄卷三三・建炎四年五月丁未條。
 (20) 會編卷一四二・建炎四年九月二十五日條。要錄卷三七、同月戊辰(二十九日)條。
 (21) 金史卷七七・撻懶傳。同、劉豫傳。要錄卷三二・建炎四年三月條。外山氏前掲論文。
 (22) 會編卷二二〇・紹興二十五年十月二十五日條。宋史卷四七三・秦檜傳。要錄卷三八・建炎四年十月辛未條。同卷三九・同年九月丙午・丁未各條。外山軍治氏著「岳飛と秦檜」。同氏著「金の對宋政策」(「清朝の邊疆統治政策」所載)參照。
 (23) 建炎以來朝野雜記甲集卷十九・「靖康・建炎・紹興大臣和戰守避說」項參照。
 (24) 拙稿「南宋鎮撫使考」參照。
 (25) 註「(23)」參照。
 (26) 此の豫想は富平大敗後深刻な現實として張浚自身に迫つてきたが、そのことについての詳細は別稿にゆずる。
 (27) 會編卷一一七・建炎二年五月二十日條。要錄卷十五・同月甲午條。會編卷一一八・同年九月十三日條。要錄卷十七・同月辛丑條。會編卷一一九・要錄卷十八・同年十一月壬辰條。宋史卷三七二・王庶傳。要錄卷三四・建炎四年六月戊寅條。
 (28) 四章イ項參照。詳細は別稿にゆずる。
 (29) 宋史卷一六七・職官志「宣撫使」。朝野雜記・甲集卷十一・「宣撫處置使」。六曹・寺監・帥司の上に立ち、所轄内のあらゆる人事に專決權を得た獨任の職。註(1)諸條。拙稿「南宋建國期の

- (30) 武將勢力に就いての「考察」參照。
 (31) 張浚が政府に示した對立的行動の例は少くない。詳細は別稿にゆずる。
 (32) 要錄卷二五・建炎三年七月庚子條。
 (33) 註(1)參照。要錄卷五・建炎元年五月乙卯條。
 (34) 要錄卷四三・紹興元年四月丁亥條「然議者謂。使(曲)端不死。一旦得志。邊其廢辱之憾。端一搖足。秦蜀非朝廷所有。雖殺之可也」。
 (35) 要錄卷三・建炎元年三月戊午條。宋會要稿・職官第四一冊「總領所」項。朝野雜記甲集卷十一「總領諸路財賦」項。宋史卷一六七・職官志「總領」項。
 (36) 要錄卷九五・紹興五年十一月乙酉條「趙開嘗論。總領財賦於四路漕計或不相關。云云」。
 (37) 宋史卷三七四・趙開傳。要錄卷四・建炎元年四月丁亥條。同書卷十一・同年十二月甲戌條。
 (38) 日野先生著「父子の發達について」參照。
 (39) 此の狙いをもつ所謂張浚人事には、富平大敗の後、更に一段と明瞭な路線が確認される。
 (40) 會編卷一四二・建炎四年九月二十日條。
 (41) 要錄卷三九・建炎元年十二月甲戌條。同卷十八・建炎二年十一月己酉條。
 (42) 註(2)參照。
 (43) 要錄卷三六・建炎四年八月癸未條。同卷三二・建炎四年四月戊子條は間接の參考となる。
 (44) 會編卷二三七・紹興三十一年十月二十九日條。太學生程宏圖の上書。中興備覽第一「議用兵」の項。
 (45) 本稿の成るに當り、懇切な御指導を頂いた日野先生を始め、色々と御便宜を賜った斯波義信、原口仁の諸大兄に深く謝意を表する次第である。(尙本稿は昭和三十一年三十三年度の文部省科學研究費による綜合研究の分擔報告の一部である。)